西の丸御蔵城宝館特別展　逸品紹介①

名古屋城の銅鯱

西の丸御蔵城宝館プレオープン特別企画「鯱展」

令和３年４月16日（金）から５月９日（日）まで、西の丸御蔵城宝館において、プレオープン特別企画として「鯱展」を開催しました。ほぼ同時期、昭和天守閣の復元金鯱が地上に降ろされ名古屋城二之丸広場や栄のミツコシマエヒロバスで展観されたことにあわせ、金鯱にまつわる資料や名古屋城に今ある銅鯱を見ていただこうという企画でした。会期は短くポスター類も作らない変則的な展覧会でしたが、お披露目する場所があまりなかった銅鯱を一堂に会する珍しい機会になりました。

「鯱展」陳列のようす

名古屋城の銅鯱とは

名古屋城の銅鯱は、築城期から名古屋城にあったものではなく、明治43年（1910）に江戸城から移されたものです。当時名古屋城は武家の城では疾うになく、名古屋離宮という天皇の宮殿として宮内省が管理していました。同じく宮内省が管理していた宮城すなわち旧江戸城の銅鯱が、この年蒸気機関車で名古屋に運ばれました。それらは、金板貼りの鱗を木芯にかぶせたいわゆる金鯱ではなく、青銅を鋳型に流して作った鋳物であり、西北隅櫓や表一之門などの名古屋離宮の櫓や門に掲げられました。

昭和20年（1945）の空襲により天守の金鯱は天守とともに焼失しましたが、西北隅櫓など３棟の櫓は類焼せず現存しており、青銅製の旧江戸城鯱も上に載っています。全焼した東北隅櫓などの鯱の一部は、鋳物であったゆえ炎上せず燃え残りました。それらをこの鯱展で展示したのです。

写真の銅鯱は、痛ましく損傷し頭部しか残っていませんが、眼光鋭く、ひときわ優れた作行を示しています。明暦大火の後の明暦３年（1657）10月、渡辺銅意という幕府お抱えの鋳物師が制作したという銘があり、江戸城の蓮池御門に掲げられ、明治43年名古屋離宮の正門として蓮池御門とともに移築されたことが、古写真や宮内庁に所蔵される記録類から明らかになりました。

この他、燃え盛る櫓から落ちた衝撃で真二つに割れた銅鯱、口の奥に炭化した木材が残る銅鯱も展示しました。来館者の反響は大きく、多くの方が、江戸城から名古屋城にもたらされ空襲を生き延びた銅鯱に驚き、そして見入ってくださいました。（学芸員　朝日美砂子）

名古屋城正門銅鯱 明暦3年（1657）作
（名古屋城総合事務所蔵）

西の丸御蔵城宝館特別展　逸品紹介②

五条橋の擬宝珠はいくつあったのか？

五条橋擬宝珠

先に閉幕した特別展「名古屋城誕生！」（令和３年11月１日～12月19日）に、「五条橋擬宝珠」を出品しました（図１）。五条橋は名古屋の堀川にかかる橋であり、「擬宝珠」とは欄干の柱の頭部に据える装飾のことです。

この擬宝珠には「五条橋」「慶長七年壬刁」「六月吉日」の銘が刻まれています。名古屋築城とともに堀川が開削されたのは慶長15年（1610）以降なのに、なぜ慶長７年の銘があるのでしょうか？実はこの擬宝珠はもともと清須城の近くを流れる五条川に架かる五条橋に据えられていたのですが、堀川開削にともなって名古屋に移されたのです。

図１　五条橋擬宝珠
（名古屋城総合事務所蔵）

素朴な疑問

現在、名古屋城には五条橋擬宝珠が６基伝わっています。これらは昭和13年（1938）に五条橋が現在の橋に架け換えられた際に取り外されたことがわかっています。これらはすべて、もとは清須の五条橋に据えられていたと考えられてきましたが、６基のうち銘が刻まれているのは４基だけで、よく見ると銘のある４基と銘のない２基では若干形も異なります（写真は銘のある擬宝珠）。いかにも不自然です。

擬宝珠はいくつあったのか

そこで江戸時代後期に尾張藩士の高力種信（猿猴庵）が著した『尾張名陽図会』にある五条橋の挿絵をみると、なんと擬宝珠は橋の両端に２基ずつ、計４基しか描かれていません（図２）。残りの２基はいつ据えられたのでしょうか？

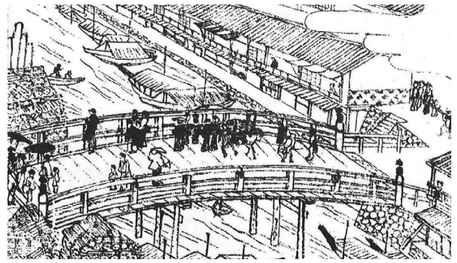

図2　江戸後期の五条橋
『尾張名所図会』より
（愛知県郷土資料刊行会、1971年）

大正５年（1916）に刊行された『名古屋市史　地理編』には、五条橋が明治34年（1901）に架け換えられたとあります。さらに調べると、昭和の初め、五条橋が今の橋に架け換えられる直前、『愛知県史』編纂のために県が橋を調査した際のメモが、県の公文書館に残されていました（図３）。

これをみると、橋の中央にも擬宝珠が据えられ、擬宝珠は計６基に増えています。そして銘は「六本ノ内四本ニアリ、中央ノモノハ記サス」とあります。この中央の擬宝珠２基が、現在名古屋城に伝わる銘のない擬宝珠２基に当たることは間違いありません。おそらく銘のない２基は明治34年の架け換えにともなって増設されたのではないでしょうか。

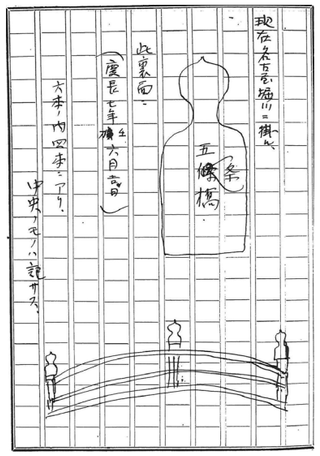

図3　五条橋図・銘
（愛知県公文書館蔵）

今後の課題

まだ問題は残るものの、これまで五条橋擬宝珠の来歴の一部が誤って伝えられてきた可能性の高いことがわかってきました。今後は明治時代の五条橋に関する史料を探り、先に記した推測が妥当であるか、さらに検証を進めたいと思います。（学芸員　木村慎平）